

叶わぬ恋と知りながら

### プロローグ

「カナちゃん、行っちゃヤダ……」

物心ついた頃から、ずっと一緒にいて、大好きだった幼馴染幼なじみのカナちゃんこと水城奏みずきかな。

彼の唯一の家族だった母親が亡くなり、遠い街の親戚に引き取られることになってしまった。

——それはわたしが十歳で彼が十四歳の秋のこと。

ふたりとも早くに片親を亡くしていたせいか、お互いの寂しさがわかる、とても心の距離が近い相手だった。

母はわたしが五歳の時に亡くなったけれど、父とはその前から一緒に暮らしてはいなかった。

父はわたしより再婚相手とその娘との生活を取ったから……

「ねえ、もう一度うちのおじさんに頼んでみようよ？」

身体の弱かった母に代わり、わたしをこれまでずっと育ててくれたおじは母の兄にあたる。

そしてカナちゃんはおじが監督を務める少年野球チーム「ストライカーズ」の一員で、おじの息子……つまりわたしの従兄いとこと同じ年で仲がよく、わたしともよく一緒に遊んでくれた。彼の母親が

夜遅くまで働いていたのもあって、家でご飯を食べたり泊まったりする家族同然の付き合いだった。

おじの家は元々チームの子やOBの人たちの出入りが激しかったし、誰かが下宿していることも多かった。だからカナちゃんが中学を卒業するまでのたったの半年間。おじさんに頼めば、どうにかなると思っていたのに……

「監督に頼んでも無理なんだ。でもいつか——奈々がおとなになったら迎えに来るよ」  
「ホントに？」

それが本当ならどれだけうれしいことか。

わたしは泣きながらカナちゃんにすがりつく。

彼には異国の血が混じっていて、瞳を下から覗き込むと蒼みがかったグレーに見える。

わたしはその瞳を見るのが大好きだった。

「だから泣かないで。奈々に泣かれるのが一番つらいよ」

彼はわたしの涙を指で拭い、おでこまぶたにやさしいキスを落とした。

わたしがちいさい頃はよくしてくれたけれど、いつのまにかしてくれなくなつたおまじない。

「絶対……約束だよ？」

「約束するよ。だから、奈々のここのキスを僕に予約させて？」

そつとわたしの唇に触れる彼の指は長くて綺麗で……おとなの男の人みたいに思えた。

「いいよ、カナちゃんなら……だからきつと迎えに来てね」

離れてしまうのは悲しかったけれど、彼がそう約束してくれたことがうれしかった。

ただその後、彼からの連絡はまったくなかった。

何度も書いた手紙は、いつしか宛先不明で戻ってくるようになった。

わたしが一番はいつだってカナちゃんだったけど、四つ年上の彼からすればわたしはまだまだ子供で……恋愛対象になれないってことはわかっていたのに。

別れ際の約束がうれしくて……それからもずっと、馬鹿みたいに彼を待ち続けてしまった。

——あれから十四年。

わたしのファーストキスはいまだ、誰のモノにもなっていない。

カナちゃんのこととはとつくの昔に諦めている……

ただ、彼以上に好きになれる人ができなかつただけ。

そして誰とも付き合うことのないまま、わたしは二十四歳の秋を迎えた。

「上野奈々生。来週から経営企画部へ異動してもらいたい」

お昼休み前、上司に呼び出され、突然言い渡された人事異動はあまりにも想定外すぎて……わたしの思考回路は思いつきり停止してしまった。

「はい？ あの、わたしが……経営企画部へ、ですか？」

わたしが勤める綱嶋物産は海外にも支社を持つ大手企業だ。

その会社の経営企画部といえば会社の中枢。高学歴でバイリンガルな総合職のエリート社員たちが多く在籍している。

そこに一般職で総務部勤務二年目のわたしが異動？

無名私立女子大学の国文学科卒業で、英語もまともに話せないというのに！

「君には新しく就任する経営企画部統括部長のアシスタントに就いてもらいたい。なに、アシスタントと言っても語学力や専門知識は必要ない。スケジュール管理をする秘書のような仕事だ」

統括部長といえぱうちでは常務取締役が兼任するポスト、つまり重役になる。

「あの、それほどの大役でしたら秘書課の方が適任ではないのですか？」

わたしに秘書のスキルはまったくないのだから。今までの仕事でも特別評価されるような活躍は

していないし、総務の仕事は無難にこなすのが精一杯だ。せめて容姿やスタイルがよければ今回抜擢された理由になるのかもしれないけれど、わたしの見た目は至って普通……だと思う。

幼い頃からおじ家族などに『可愛い』と言われて育ったけれど、それは周りにいるのが男の子ばかりだったからだ。

その証拠にまだ男の人と付き合ったことがない。

恋愛らしき話は、初恋のカナちゃんとのことだけ……

それに、本当に可愛いというのはあの子みたいな娘のことを言うのだ。——父の再婚相手の娘、お人形さんみたいに可愛らしかった義姉。

「君は、海外事業部の綱嶋奏くんを知っているね」

「あ、はい。それはもちろんです」

綱嶋物産の次期後継者と言われている彼を社内で見知らない人はいない。

子供のない社長夫婦が養子に迎えた甥で、アメリカの大学を出てMBAを取得後にこの会社へ入社。そしてある事件があったあと、海外支社立ち上げのために二年前からドイツに赴任中だ。

わたしが入社した時すでに日本にいなかったため、まだ一度もお目にかかったことはない。ただ、どうやらかなりのイケメンで仕事もできる人らしく、いまだに先輩方や女性社員の話に上がる。

射止めれば玉の輿だけ、残念なことすでに婚約者ありだ。

「実は先日の役員会で彼が統括部長に就任することが決まったのだよ。急ぎ帰国することになったが、彼のアシスタントを務める翠川くんは現地での引き継ぎのために残らなくてはならなくてね。彼が戻ってくるまでの間、君にアシスタントをやってもらいたい。なに、ほんの三ヶ月の間のことだ」

「あの、他に適任者がいらつしやるはずですよ。わたしでなくても……」

たとえ短い期間でも無理！ わたしにはそう言い切りたい事情があった。

「いや、君にしか頼めんのだよ。彼が海外勤務になった理由は、君も聞いたことがあるだろう？」

——確かにわたしも知っている。それは有名な話だった。

二年前、彼に好意を寄せていた同期の女性社員が社内でもカッターを振り回し、綱嶋さんに近づこうとした別の女性を切りつけたという。止めに入った綱嶋さんが軽い怪我をしたそうだが、危害を加えた社員というのが社長夫人の身内だったらしく、事件は公にならなかった。

それ以来、彼には女性の部下やアシスタントはつかなくなったと聞いている。

けれど一応わたしも女なんだけど？ それはかまわないのかとツツコミたくなる。

「彼が君を指名したのだよ。その理由は……君にも心当たりがあるはずだ」

「そ、それは……」

わたしは……それが理由で避けたかったのだ。

「君は、彼の婚約者である宮之原美麗さんの義理の妹にあたるそうだね」

そう、彼の婚約者はわたしの義理の姉。といっても、もう十八年は会っていないけれど。

闘病中の母と幼かったわたしを捨てて父が再婚した女性の連れ子、それが義姉だ。

再婚相手は大正時代から続く宮之原財閥一族の娘で、父とはその系列会社に勤めていた時に出会ったらしい。

母は産後に身体を壊し入院しがちだったため、わたしは小さい頃からスポーツ用品店を営むおじ夫婦に預けられて育った。父は仕事が忙しく、たまにしか会いに来られないと聞かされていたけれど……本当は不倫し、彼女の家族と一緒に暮らしていたからだった。

そのうち彼女が妊娠し、お腹の子供を盾に離婚を迫り——病床の母はそれを受け入れたという。そして母は生きる気力を失い……しばらくして亡くなってしまった。

父は再婚時に宮之原の婿養子に入っており、現在はその系列会社の重役を務めながら、再婚相手と義姉、異母妹の四人で暮らしている。

わたしは父から養育費をもらっていたものの、ほとんど一緒に暮らしたことがない。

ああ……こんなことなら、いくら卒業間際に内定先が潰れたからといって、長年疎遠だった父に就職先を頼ったりしなければよかった。

宮之原系列でない会社を就職先にと頼んだ時、大手企業を紹介してくれたのは、実の娘に対してすこしでも愛情が残っていたからだと思っていたのに……かえって悪い結果を招いてしまった。

まさか綱嶋が義姉の婚約者の会社だったなんて！ そのことを知ったのは随分あとだけど、わかった時にやめておくべきだったのだ。

わたしを嫌っている義姉が、このことを知ったらどうなるのか……考えただけでも恐ろしい。

「とりあえず、明日から秘書課で研修を受けるように。連絡はしてあるから」

「そんな……」

「まあ、頑張りたまえ」

そう言い残し、上司はわたしに書類を手渡すとさっさと会議室を出ていってしまった。

どうすればいいのかな……。悩みながら職場へ戻るその足取りは重い。

「ただいま……」

すでにお昼休憩の時間に入っていたらしく、総務部にいるのは惣菜パンにかぶりついている同期の田原邦<sup>たはらくに</sup>だけ。お弁当組のわたしは、いつも彼女と一緒にデスクでお昼を食べている。

「ちよっと、どうしたのよ？ 落ち込んだ顔して……なにかあった？」

くりくりした目を見開いて、心配そうにこちらに視線を向けてくる邦の表情はとても可愛い。

小柄で小動物のような彼女は、見かけによらず超積極的な肉食系女子だ。

わたしとは対照的な性格だけど、さっぱりしていて案外気が合っていた。

「どした、奈々生？ 悲愴<sup>ひそう</sup>な顔して」

わたしたちに声をかけながら総務部に入ってきたのは、四期上の真木理保<sup>まきりほ</sup>子先輩。彼女は入社当時わたしの指導社員で、仕事もできる才媛<sup>さいえん</sup>だ。この春から営業部に異動してしまった。

外回りが多く先輩もかなり忙しいようだけれど、彼女が内勤の時はこうして三人一緒にお昼を食べている。

「ちよっと上呼び出されました……。先輩は午後から外回りですか？」

「今日はずっと内勤よ。それで、用件はなんだったの？」

先輩は空<sup>あ</sup>いてる席に座ると、テイクアウトしてきた食べ物<sup>あ</sup>の袋を取り出した。それを見てわたしも自分のお弁当箱を開ける。今日のおかずは昨夜おばさんが作ってくれたロールキャベツ。よく味の染<sup>しみ</sup>みたそれを頬張ると、すこしだけ落ち着けた。

「実は……来週から経営企画部へ異動するようになって。新しく着任する統括部長のアシスタントに任命されたんです。なので明日から一週間、秘書課で研修を受けなきゃならなくて」

「なっ、奈々生が経営企画部へ……異動？」

「ええっ？ 嘘でしょ？」

ふたりには思いつきり驚かれてしまった。邦は食べていたカスケートを喉に詰<sup>は</sup>まらせるし、先輩は飲みかけていた珈琲<sup>コーヒー</sup>を噴<sup>は</sup>き出しそうになっていた。

「それで、新しい統括部長って……誰？」

「海外事業部の綱嶋<sup>つなしま</sup>さんです。社長の甥<sup>おい</sup>」

「へえ、綱嶋さん帰国するんだ。アシスタントっていいなあ……。奈々生、絶対会わせてよね」

邦は単純によるこんでいるけれど、こっちはちっともうれしくない。

「綱嶋くんがそのポストに就<sup>つ</sup>くのはわかるけど、どうして奈々生がアシスタントに抜擢<sup>は</sup>つてされたの？」

先輩と綱嶋さんは確か同期だ。黙っているわけにもいかず、とりあえず簡単に事情を説明した。綱嶋さんの婚約者がわたしの義姉で、わたしはコネ入社だということを。

「それじゃ奈々生は宮之原のお嬢様だったの？」

邦が目をキラキラさせて聞いてくる。

「父が婿養子に入っただけで、わたしは宮之原とはなんの関係もないよ。それに……わたしは義姉に嫌われてるから」

「嫌われてる？ あたしと違って誰にでも好かれる奈々生が？」

邦が素っ頓狂な声で聞き返してくる。男性に対してかなり積極的な彼女は、同性からは少々煙たがられていた。わたしはいい子だと思うんだけど。

「このまま義姉の婚約者のアシスタントになるわけにはいかないのよ。できるだけ早く転職先を決めて、会社を辞めようと思つて……」

だって、義姉とは二度と関わりたくなかつたから。

就職当時はこんな因縁のある会社だとは露知らず、よろこんで仕事をしてきた。先輩や邦と出会って、ずっとこの会社で頑張るつもりだったのに……社長の甥が義姉の婚約者だと知り本当に焦つた。ただ、義姉はここ数年海外で仕事をしていると聞いていたし、綱嶋さんが海外勤務中で顔を合わせることがなかつたため、つい彼が帰国するまでは勤め続けてもいいかと先延ばしにした結果がこれだ。「なんで奈々生が会社を辞めなくちゃならないの？」

邦が訝しむのも無理はない。わたしと義姉にはそれほどの確執がある。もつとも、わたしはなに

もしていないけれど。

「それって、その女が昔……奈々生を階段から突き落としたことがあるから、だよな？」

「先輩、どうしてそれを？」

この会社の誰にも言つてないはずなのに……

「聞いたのよ、あなたの従兄から」

そっか、従兄が先輩に話したんだ。それとも先輩が聞いたのかな？

あの事件のトラウマから、わたしは今でも階段を降りるのが苦手で、やたらと手すりを持つ癖が抜けない。先輩はそれに気がついていたらしい。

——そう、あれは母が亡くなり一時期父の家に引き取られていた頃のこと。その時わたしは、しばらくの間ひとりでは階段を降りられないほどのトラウマを負つた。

なんとか手すりを持って降りられるようになったのは、一緒に階段を降りる練習をしてくれた四歳上の従兄の慣兄や、大好きだった幼馴染のカナちゃんのおかげだ。

十九年前……母が亡くなったあと、すでに再婚していた父はわたしを引き取るとおじたちを押し切つた。だけどそれはわたしのためでなく、自分たちの世間体のため。

そのことをわたしは、すぐに思い知る。父は最初から他人行儀で、継母も義姉も迷惑がつている態度を隠そうとしなかつたから。

『わたしのパパなんだから、近づかないで！ あんたなんか早く出ていっちゃえ！』  
引き取られたその日の夜、父のいない所で義姉にはつきりとそう言われた。

おじの家で周りにいたのは男の子ばかりで、わたしは義姉ができることを密かに期待していたというのに、まったく歓迎されていなかったのだ。

病床の母に離婚を迫るような継母にしても、わたしをよく思うはずがない。それに継母は、生まれたばかりの異母妹のことで手一杯だった。

たまに父が早く帰ってきてても、義姉がべつたりくっついて近寄ることもできなかった。確かに義姉はわたしより長く父と暮らしていたし、甘え下手のわたしより仲が良く、本当の娘のように見えた。

——本当はわたしのお父さんなのに……

悔しかったけれど、そう言いたくも言えないほど父と距離があった。

父だって懐かない実の娘より、見た目も可愛らしい義姉のほうがいいに決まっている。だからわたしと暮らそうともしなかったし、会いに来なかったのだろう。さらに今は、父と継母、ふたりの間にできた異母妹もいる。

それでも父が家にいる日はまだよかった。いない日は宮之原家の人たちに徹底的に無視される。

わたしが自室にいれば勝手にごはんがいらぬことにされるし、洗濯物を出せば捨てられていたこともあった。

『それ服だったの？ 雑巾かと思っただわ』

義姉はそう言って、おばが持たせてくれた服を馬鹿にしてゴミ箱に捨てていたので。

彼女や異母妹はいつだって可愛らしくて高そうな服を着ていたから、それと比べれば質素だったのは事実。だけどその服はおばが選んで買ってくれたものだったからすぐショックで……

しかし義姉に捨てられたことを言おうものなら、継母に『美麗がそんなことするはずないでしょ！』と怒鳴られる始末。

わたしはその家にいるのが嫌で嫌で、おじさんの家に帰りたくて堪らなかつた。

だけど、おじさんに『やっとお父さんと暮らせるのだから、可愛がってもらうんだぞ』と送り出された以上、すぐに帰りたいとは言えなかつた。

もしかしたら、わたしが戻ると迷惑かもしれない……と思っていた。

そんなわたしが父の家にいられなくなる出来事があったのは、そう——あれは母の命日に近い日曜日の朝だった。

その日、父とわたしはふたりだけで母の墓参りに行くことになっていた。わたしは、もしかしたら墓地でおじの家族と会えるかもしれないと密かに期待していた。

『奈々生、そろそろ出かけよう。車で待ってるから早く降りてきなさい』

父に呼ばれ、二階の自室を出て階段を降りようとした、その時——わたしはいきなり誰かに背中を押された。

体勢を崩して落ちる瞬間、うしろに伸ばした手で掴んだそれと一緒に、踊り場まで転げ落ちた。

先についた左手から鈍い音がし……そのあとわたしの上にそれが落ちてくる。

あちこちを酷く打っていたけれど、その痛みをすぐに感じることはなかった。しばらくの間は頭が真っ白になっていたから……

『痛いよお！ ママ、パパ！』

その声に驚き、ようやく目を開けると、泣き真似をしながらわたしを見下ろす義姉の姿が見えた。『この子が悪いのよ！ わたしを引つ張ったの……頭が痛いわ。いっぱい打ったのよ』

そう言いながら、継母に泣きつく義姉。

彼女の服をわたしが引つ張った？ 確かにそうかもしれないけれど、それはうしろから押された時に咄嗟に掴んだだけなのに。

『なんてことしてくれるのっ！』

身体を起こし『違う』と言いかけたその瞬間、継母が恐ろしい顔でわたしの頬を打った。

その勢いでふたたびうしろに倒れ込んだわたしは、またもや頭を床に打ちつける。

『美麗、かわいそうに……すぐに病院へ連れて行ってあげるからね』

痛い痛い泣き叫びながら、両親と車で出ていく義姉。誰もいない家に取り残されたわたし。

誰かに痛みを訴えることもできず、しばらくの間、呆然としていた。

時間が経つと左手首がジンジンと痛みはじめたけれど、怖くて動かせない。

『おじちゃん、おばちゃん……いたいよお……ううっ……うえっ……』

泣いて叫んでも助けてくれる人は誰もおらず、痛みはあとからどんどん襲ってきた。

帰りたい。おじさんの家に……

そう思ったわたしは、動かない手首を抱えて家を出た。

駅の方向もわからないまま、よろよろと歩き続ける。あちこちが痛くて、不安で、怖くて……嗚咽が止まらなかつた。

——結局通りかかった人が、わたしの頬が腫れているのと、左の腕を抱えたままなのを不審に思い、おまわりさん呼び……病院へ連れて行ってくれた。

『奈々生！ 大丈夫か？』

おじさんたちが駆けつけた頃には治療は終わり、わたしの左手にはギプスが嵌められていた。

家はどこかと聞かれ、わたしは『ウエノスポーツ用品店』と答えたから、おまわりさんがおじに連絡してくれたのだ。

『奈々ちゃん、痛かったよね？ だからあんな男のところへ帰すのは反対だったのよ！』

おばさんは駆け寄ると、わたしの腕を気遣いながら抱きしめてくれた。その腕の中は温かくて、止まっていた涙がふたたび溢れてしまう。

『いたかった……こわかったよお……ううっ……うわぁーん！』

わたしは泣きながら必死で説明した。義姉にうしろから押されて階段から落ちたこと、あの家でされた仕打ちのいくつかを。

『うんうん、奈々生は悪くなんかないよ。こんな目に遭って……かわいいそうに』

『かえりたい……上野のおうちにかえりたいよ』

『ああ、帰ってこい。もう二度とあんな家に返すものか!』

おじさんもそう言ってくれて、ようやくわたしは安心することができた。

わたしは全身打撲で頭部に瘤ができ、左手首の尺骨が折れていたが、脳波に異常はなかった。踊り場のある階段だったのと、子供で身体がやわらかかったのが幸いしたようだ。そうでなければと考えたらゾツとする。

一方の義姉はいくら検査しても瘤すらできていなかったそうだ。わたしの上に落ちたのだから、酷くないのはあたりまえ。それなのに大騒ぎし、病院でも首を傾げられ……自宅に戻るとわたしはおらず、玄関のドアも開きっぱなし。警察から呼び出されて義姉の嘘はバレ、父たちはわたしを虐待していたという疑いをかけられたらしい。

大事にしないでほしいと、父はその日の夜遅く頼みに来た。しかし謝罪してほしいというおじたちの要望に反して、義姉はわたしを突き落とすことを認めず、継母が謝りに来ることもなかった。そのため、おじと父……というよりも宮之原側はかなり揉めたらしい。

おじたちは児童虐待で訴えてでも、わたしを養子にして正式に引き取りたいと交渉したそうだけど、世間体を気にした父はわたしを養子に出すことを拒否。そのうち宮之原側からおじの営むお店に圧力がかけられ……随分と騒がしかった記憶がある。

結局謝罪はなし、慰謝料を含んだ養育費を一括で払うことで話がつき、わたしはおじたちのもので暮らすことが決まった。

わたしとしてはあちらの家と縁が切れるなら、それでよかった。

「なにそれ……酷すぎっ!」

話し終わると、さつきまでわたしが宮之原の娘だと羨ましがっていた邦の態度が一変していた。

もっとも、母が父と離婚した際、わたしは母を筆頭とした上野の戸籍に入っている。父はわたしを置いて宮之原の養子に入ったので、わたしは宮之原の籍には入っていない。

「人の父親を奪っておきながら偉そうに! 怪我までさせて嘘つくなんて最悪の女じゃん。いくら子供の頃の話でも、そんな女選ぶなんて綱嶋さん最っ低! なんか彼の株が下がったわ。むしろ軽蔑するよ!」

酷い言われようだけど、実はわたしもそう思っていた。

あの義姉を選ぶなんて……いくら評判のいい人でも、それだけで好感は持てない。

「だから、綱嶋さんが帰国する前に辞めようと思ってる……!」

「なんで? そんな女のために奈々生が会社を辞めることないってば!」

邦はかなり怒り心頭だ。

「でも義姉とはできるだけ関わりたくないの。それなのに今回の人事には面食らっているのよ。義姉とわたしの因縁を知らないにしても唐突すぎて!」

「それならいっそのこと、直接彼に事情を話してみたらどう? 大丈夫。綱嶋くんは話のわかる人よ。それは同期のわたしが保証するから!」

なるほど、直接ね。ここは本人を知っている先輩の意見を聞くのが得策かもしれない。

「へえ、センプイがそこまで言うつてことは、綱嶋さんつて噂通りのイイ男なの？ もしかしてセンプイと艶うぶっぽい話とかあつたりして？」

「邦、それはないわ。確かに彼は綺麗きれいな顔立ちをしてたけど。ちよつとデキすぎてて胡散臭うさんくさいというか、本心が読めないところのある男だったからね」

「センプイのタイプじゃなかったつてこと？」

「あら、観賞用としては最高よ。物腰がやわらかくて、スリーピーススーツの似合う細腰の肩幅がある体型でね。さすがに入社当時はオーダーメイドは着てなかったけど、それでもかなりいいスーツを着てたと思うわ」

はじまつちゃつた……先輩のスーツ萌え談義。

クールでカッコイイ先輩なんだけど、スーツ萌えがすごくて、その審美眼しんびがんはかなり鋭い。

そんじよそこのスーツでは萌えないどころかダメ出しがはじまる。先輩曰く、日本のビジネスマンはスーツのセレクトが下手なんだつて。少々お腹が出てても、体型に合わせてピッタリに仕立てたスーツはその人に合つていて、それも萌えるらしい。

「センプイ、スーツが似合つても奈々生にとつては憎にくつき義姉の婚約者なんだから！ なにか対策を考えなきゃだよ」

「そ、そうね。とりあえず奈々生をアシスタントに指名した理由を直接聞いて……すぐに辞めるなんて言わずに、総務に戻してもらえよう掛け合つてみたらどうかしら。もしすぐに戻れなくても、本来のアシスタントの翠川くんが帰国するまでの三ヶ月間だけなら大丈夫じゃない？」

「そうですね……別に綱嶋さんに対して文句はないし。ただ、義姉と関わり合いたくないだけだから。義姉がまだ帰国しないのなら、なんとかなるかもですよね？」

話してみる価値はあるかもしれない。それに一週間で転職先を探すのは難しすぎる。

「そうそう。もしかしたら奈々生の話を聞いて、婚約破棄になるかもしれないしね！」

邦、怖いこと言わないで。そんな幼い頃の話で破談になったりしないと思うよ。義姉もそれなりに成長しているだろうし。

「それじゃ、直接話してみます。ただでさえおじの世話になりつぱなしで、いきなり無職になるわけにはいけませんから。いつかひとり暮らしするために……」

本当は就職したらすぐにも、おじの家を出て独立するつもりだった。それなのに、先に慎兄が家を出てしまつて、出たくても出られなくなつてしまつたのだ。

『お願いだから家を出るなんて言わないでちょうだい。慎一がいなくても寂しいのに、奈々ちゃんが出ていくなんてダメよ！ あなたはずつと、この家に来てくれなきゃ』

おばに泣きつかれて、しかたなく家を出るのは諦めた。

幼い頃から育ててくれた彼女に懇願こんがんされては逆さからえない。本当の娘じゃないけれど、一生面倒を見るつもりはある。それほど、おじたちには恩を感じているのだから。ただ、慎兄が結婚したらいずれは同居すると思う。あれで親しいところがあるし、その時に実の妹でもない小姑なんて邪魔なだけだ。その頃には家を出たほうがいいとも思っているけれど。

「奈々生は気を遣いすぎだよ。それだけ苦労してきたんだろうけど……」

先輩がしみじみと言いながら、ギュッと抱きしめてくれた。

「そんな、たいした苦労してないですよ。養育費はもらってだし、大学まで出してもらえたんですから。おじやおばもやさしくて、本当の娘のように育ててくれて……きつと、父に引き取られるよりもずっと、しあわせだったはずです」

おじたちからは本当の娘になってほしいとも言われている。それも養女とは違う形——つまり慎兄のお嫁さんとして。

「辞める辞めないは綱嶋くんと話してからとして、あとは明日からの研修をどうするかね。なにかなんて？ 服装とか」

「制服じゃなくてスーツでって言われてます。だけど、どんなスーツを着ればいいのか……」

総合職の女性は、わたしたち一般職のように制服ではなく基本スーツだ。真木先輩も、今日はカッコいいパンツスーツ姿。秘書課の社員たちは、他の総合職の人たちのようなシンプルなスーツではなく、華やかなものを着ていることが多い。わたしがそんな服を持っているはずもなく、入社式に着たりクルートスーツを引っ張り出してくるしかないと考えていた。

「それじゃ、明日の研修までにいろいろと準備しなきゃね」

「いろいろとって……」

先輩が思いっきり楽しそうな顔をしている。彼女がこういう顔をするのは、なにか企んでいる時で……

「そうね。総務課の上野奈々生はこれでいいけど、重役のアシスタントになるなら、もうちょっと頑張らないとね」

「えっ、なにを頑張るの？ 邦」

ふたりがニッコリ笑って、にじり寄ってくる。

「邦、今日の終業後は緊急ミッションよ！ 奈々生を变身させるからね。研修先の秘書課の気取った女どもに、わたしたちの奈々生を馬鹿になんてさせないんだから！」

気持ちほうれしいけど、それは無理じゃないかな？ だって素材がモノを言う部分大きい。

「まあ任せておきなさいって。綱嶋くん好みに仕上げてあげるから」

別に綱嶋さん好みじゃなくても、抵抗したけれど……

閉店間際のセレクトショップに連れて行かれ、スーツや靴など一式揃えることに。バッグは先輩が使わなくなったブランド物を異動祝いだと言ってプレゼントしてもらったけど、それ以外の準備で夏のボーナスが半分以上飛んでしまった。

それから更に先輩の知り合いの美容師さんに頼み込んで、髪型を変えてもらい、化粧の仕方も教わった。まあ、外見が変わったところで中身まで変わるわけじゃないけれど。

鏡の中の自分はちよっぴり以前と違って華やかで、お嬢様っぽく見えてくすぐったい。

「ここまでしなきゃダメなんですか？ 先輩」

「ダメよ。奈々生はただでさえ自分に自信がないからね。今のまんま出向いても、萎縮するだけでしよう？ それが目に見えているから、ここまでするのよ」

確かに、コネ入社なうえに一般職のわたしは総合職の私服組に引け目を感じていた。容姿に対し

てのコンプレックスも元々酷かった。それは、可愛らしかった義姉に父親を取られたのが原因だ。その義姉を選んだ婚約者に会うことに対して、気後れもかなりあった。だけど今の自分なら、すこしだけ大丈夫かなって。

「やれるだけのことをやって挑むのみよ。奈々生は頑張り屋だし、仕事についてはわたしが仕込んだんだから大丈夫よ。自信持ちなさい！」

確かに先輩には、かなり鍛えてもらった。新しい仕事を教わって頑張ればいいだけだ。見た目をこうして整えれば、なんとかかなりそうな気がしてくるから不思議。

「そうそう。この勢いで合コンも行っちゃおうよ！ 奈々生ったら、合コンも紹介も苦手だって逃げてるけど、いい加減、初恋の君のことは忘れなきゃ。初恋は叶わぬものって言うでしょう？」

「それを言うなら、実らぬものよ、邦」

「やだな、ふたりとも。もうとっくに諦めてるし、合コンや紹介は苦手なだけだよ……」

付き合う相手を品定めするのは嫌だし、誰かと付き合いたいとか思わなかった。

だけど邦や先輩には、初恋の相手が忘れられないからだと思われている。酔った勢いでカナちゃんのことを話したのは失敗だったかもしれない。

「誰とも付き合わないなんて、可愛いのもつたいないよ？ 奈々生」

「先輩まで……可愛いなんて言ってくれるのは、身内と先輩たちだけだから」

それに……わたしの場合、彼氏を作らないんじゃないって作れないだけ。そういう機会もないし、自信もない。実の父親にすら選ばれなかったのだから。

カナちゃんもきつと、別の人を選んだんだ……だから手紙の返事もなく、迎えにも来ない。

——人を好きになるって怖いな。選んでももらえなかったら、行き場のない想いを抱えてつらいだけなもの。

それからの一週間は秘書課で猛特訓を受けた。

たとえ経営企画部所属でも、スケジュール管理等では秘書課と連携しなければならないからだ。研修内容は、挨拶の仕方や電話の取り方、スケジュールの調整法など。服装や身だしなみは先輩と邦の協力で及第点をもらえたけれど、美しいお辞儀の仕方やお茶の出し方など、秘書課ならではの作法まで厳しく叩き込まれて結構大変だった。

そのうえ秘書課のお姉さま方の視線はたいそう冷たく、嫌味や皮肉も言われた。

皆が密かに狙っている若きイケメン後継者のアシスタントに指名されたのが、わたしでは誰もが納得しないのだ。きつと義姉のような人でなければ……

だけどなにを言われようと頑張るしかなかった。応援してくれる先輩や邦に申し訳ないもの。

「午前中だけって思ってたのに……夕方になっちゃった」

週末、残った仕事と渡された資料を整理してしまおうように言われ、日曜まで出勤しなければならなかった。

誰も教えてくれる者がおらず、結局予想以上に時間がかかり、夕方近くに。

ようやく仕事を終え、家の最寄駅から商店街の中にある自宅へ向かう。住居を兼ねたおじの店に来たお客様の邪魔にならないように、裏手にある駐車場側の出入り口に回る。

日曜のこの時間帯なら、おじの指導する少年野球チームの練習も終わり、コーチやOBたちが店にたむろしている頃だ。今日はその相手をするのもしんどい……

「あれ？ 誰だろう……」

駐車場には見慣れない白い車。よく見ると従兄の慎兄が乗っている逆輸入された日本の高級ブランド車と色違いだ。

わたしが近づくと、車の中から背の高い男性が降り立つ。

ラフなジーンズにジャケット姿。サングラスをしているので顔はよくわからないけれど、その姿を見ただけで懐かしいような、キュッと胸が締めつけられるような痛みを覚えた。

まさか一目惚れ？ いやいやあり得ない！ だってそんなものしたことがない。

だけど、なぜだろう？ はじめて見た気がしない……

わたしはその人から目が離せずに、その場で立ち尽くしていた。

「奈々……？」

すこし低くて甘い声がわたしの名を呼ぶ。

この声はまさか……？ それなら、さつき胸がキュッとしたのも納得できる。だって、どれだけ年月が経っても彼に逢えばすぐにわかると思っていたから。

ずっとずっと逢いたくて逢いたくて堪らなかつたその人……

「——カナちゃん、なの？」

サングラスを外したその顔には、別れた頃の面影があった。

整った顔立ちにシャープな輪郭。なのにやわらかい雰囲気を感じるの、やさしく笑う表情と、青灰色の瞳のため。

その瞳は光に透けると水晶のように綺麗で、わたしは幼い頃からそれを覗き込むのが好きだった。薄茶色のやわらかそうな髪が夕日を浴びてきらめいて見える。

「ああ、そうだよ。僕の奈々……逢いたかったよ」

微笑みながらやさしく語りかけてくるこの声。昔よりも低くなっているけれど聞き覚えがある。

それに、話す時の独特のイントネーションは間違いない『カナちゃん』のものだ。

「カナちゃん！」

わたしは思わず駆け寄り、彼の腕の中に飛び込んだ。

ぎゅうつと抱きつくともそれ以上の力で抱きしめ返され、伝わる温もりで実感する……ああ、カナちゃんだった。

だけど頬に押しつけられた彼の衣服から香るのは、すこしスパイシーで甘い大人のフレグランス。子供の頃、抱きついて甘えた時にTシャツやユニホームからした土埃や汗の匂いはもうしない。

「わたしも……逢いたかった」

——ああ、そっか。わたしは諦めたふりをしていただけで、ちっともカナちゃんのことを諦めていなかったんだ。

ずっと好きなままで……そのことを忘れようとしていただけで、彼のことをずっと想い続けていたのだ。だからカレンが欲しいとも思えなかったし、好きな人もできなかった。

再会しても、思いつきの彼と現実の彼とのギャップにショックを受けるかもしれないと予想していたけれど、実際は幻滅するどころか想像以上に素敵な男性に成長していた。

その声もやさしさも全部昔のままで……わたしの心の中の幼いカナちゃんがいた位置に、ストンと今の彼が居座ってしまった。

でも、目の前にいるのが本物のカナちゃんだったら……どうして今まで連絡のひとつも寄越さなかったの？

これまで一度も会いに来てくれなかったのに、どうして今更？

そのことを考えると、寂しさや怒りのようなものが込み上げてきた。それは涙になってみるみるうちにわたしの瞳から溢れていく。

「なんで泣くんだよ？ あれからずっと、奈々が泣いていないか心配してたのに……」

彼はわたしの頬を両手で挟み込み、親指で涙を拭き取りながら困った顔をしていた。

「それじゃ……どうして今まで、連絡してくれなかったの？ 手紙も返ってくるから、どこにいるのかもわからなかったんだよ？ それなのに、こっちの気も知らないで……なにが『心配してたよ！ カナちゃんの馬鹿……馬鹿っ！』」

ドンと拳で目の前の彼の胸を叩いた。何度も、何度も、泣きじゃくりながら……

「連絡したよ」

「嘘！」

知らない、そんなの一度も聞いてない！

「嘘じゃない。何度か電話したし手紙も書いたよ」

「そんな……おじたちからは、電話も手紙も全然ないと聞かされていたの？」

「ごめん、心配かけたよな？」

カナちゃんはポンポンとわたしの頭を撫で、ふたたび頬に手を添えると愛おしげに撫でてくる。

顔を歪めながら微笑む彼は、この街から出ていった時と同じ表情をしていた。

なによ、そんな顔されたら全部許しちゃうじゃない。

「元気にしてたのなら、いいよ……」

「やっぱり奈々はやさしいね。ずっと僕のことを待っていてくれたの？」

——迷ったけれど頷いた。だってカナちゃん以外の人なんて考えられなかったから。

「今、誰か付き合ってる人はいる？」

「いないよ……誰とも付き合ったことないよ」

「本当に？ それじゃ、あの約束……守ってくれてたんだね」

とつこの昔に諦めて、約束を守ってきたわけじゃないけれど……誰ともキスしたことがない。

「ありがとう！ うれしいよ、奈々」

ふたたびギュッと抱きしめられた。

「そう言うなら……カナちゃんは、今までなにしてたのよ」

見上げると、カナちゃんの青灰色の瞳にわたしの顔が映る。

わたしの唇をやさしくなぞる彼の指も、泣きそうに微笑むその顔も全部あの日と同じで……

幼い頃は平気だったのに、懐かしさと同時に気恥ずかしさが込み上げ、動悸が激しくなる。

「……そんなに可愛い顔するなんて、反則だよ」

可愛いと言われて慌てて俯く。だって、自分が可愛くないなんて百も承知している。

こんな素敵な男性になった彼は、今のわたしを見てがっかりしていないだろうか？ そう思う

と、いたたまれなくなってしまう。

それなのに彼はわたしの顎を持ち上げると、ゆっくりと顔を近づけてきた。

「奈々、逃げないで……」

信じられないほど近くに見えた、彼の綺麗な青灰色の瞳。

気づいた時には、わたしは目を閉じることなく、それを受け止めていた……

「……っ！」

啄むように触れ、やわらかく温かな感触を残し離れていく彼の唇。

——これがファーストキス？

二十四歳にしてようやく経験したそれはあつという間で、だけどその感慨を噛みしめる暇もないほど強く抱きしめられた。

「奈々……やっと迎えに来ることができたんだ。もう、誰にも邪魔はさせない」

耳元でカナちゃんが甘くそう言うけど、誰が邪魔するというの？

「あ、おばさんから電話」

ポケットの中の携帯が震えた。電車に乗る前に連絡していたのに、なかなか帰らないのを心配してかけてきたのだろう。

「もう、おばさんったら、本当に心配症なんだから」

すこしでも帰りが遅いと、こうして連絡してくる。それでも、仕事をはじめてからはまだ自由が利くようになったほうだ。ちよつと過保護すぎると先輩たちには言われるけれど、ここまで育てもらった恩があるから、あまり強く反発できなかった。

「ねえカナちゃん。今からうちに寄っていくでしょ？ おじさんたちもきつと会いたがるよ。慎兄は駅前のマンションでひとり暮らししてるけど、近くだからすぐに飛んで来ると思うの」

「いや、いいよ。きつと僕は歓迎されないから」

それって……やっぱり邪魔をしたのはおばさんたちだと言うの？

そんなことあるはずがない。おじもおばも、あれほどカナちゃんのことを可愛がっていたのだから。

わたしが物心ついた頃から、慎兄とカナちゃんと三人でいつも一緒にいた記憶がある。

わたしには両親との思い出ほとんどなく、季節ごとのイベントは、カナちゃんを含む少年野球チームのメンバーと一緒にが多かった。

おじが経営するウエノスポーツ用品店でスポーツ・レジャー用品などを貸し出していた関係で、

お得意さんやチームの子たちを対象にしたいろいろな催し物まねおをやっていた。

春の花見に夏のお祭りや花火、海や山に、海水浴にキャンプ。秋はバーベキューに山登り。冬のスケートにスキー。

家族がいれば当然一緒に過ごすのはクリスマスや初詣はつもちも……長い夏休みも冬休みも春休みも、他に行くところのないわたしとカナちゃんは、慎兄と一緒にうちで過ごすことが多かった。

おじさんたちからしても、カナちゃんは家族同然のはずだったのに……どうして？

「今日はもう帰るよ。またすぐに逢えるさ。それから……今日のことはまだ誰にも内緒だよ。また改めて挨拶あいさつに来るから、いいね？」

その真剣な物言いに思わず頷くと、ふたたび唇にちいさくキスが落とされた。

「それじゃ、また」

彼はそう言って車に乗り込むとエンジンをかける。

そのエンジン音は静かで、発進する時も砂利じりを踏む音だけ残り走り去っていく。わたしはキスの余韻あひびを噛みしめながら、車のテールランプをいつまでも見送っていた。

「ただいま」

「おかえり、奈々ちゃん。晩ごはんできてるわよ」

「あ、はい。それじゃ着替えてきますね」

部屋に入ってから、ぼんやりとカナちゃんのことばかり考えてしまう。

結局、今まで彼がどうしていたのか、教えてもらえなかった。

連絡先すら聞かせてもらえなかったのって、もしかして騙だまされてる？ 本当はすでに結婚して、連絡されたら困るとか？ まさかとは思えけれど、そんな不安がよぎってしまう。

だけど一番ショックなのは、こんなにやさしいおばさんがカナちゃんからの連絡を取り次いでくれなかったかもしれないこと。わたしがどれほど寂しがっていたか、知っていたはずなのに……

「よお、遅かったな。もうすこしで会社まで迎えに行かされるところだったぞ」

「慎兄、帰ってたの？」

きつい目をしたキツネ顔の従兄いとこが、居間に寝っ転がったまま、迷惑そうにわたしを見る。どうやら今日はデートがなかったらしく、晩ごはんを食べに来たようだ。

慎兄になら話してもいいのだろうか？ カナちゃんが来たことを。

「奈々ちゃんが日曜出勤だなんて！ 今までなかったのに、あの娘の嫌がらせじゃないの？ 早く辞めちゃいなさい、そんな会社」

「おばさん、今日の出勤は義姉のことと関係ないから」

今回異動の辞令が下りた時、転職するかもしれないことを伝えていた。その時はじめておじたちに、綱嶋物産は義姉の婚約者の会社であったことを打ち明けたのだ。そして今回、彼のもとで仕事をすることになったと。

「そうだぞ。無理しなくていいんだぞ。嫌ならいつでも仕事を辞める」

「もう、おじさんまで……」

その話を聞いた時のおじたちはかなり激昂げききやうしており、すぐにでも仕事を辞めると言いはじめた。とりあえず転職先を探してからというわたしの言葉で矛先ほこしなを収めてもらった。

「まったく酷いものね。友嗣ともつぐさんったら、とんでもない会社を実の娘に紹介して！」

おばは父のこととなると昔からボロクソだった。

「おふくろ、綱嶋は大企業だぞ？ むこうが奈々生の素性すじょうに気づかなければどうにかなったさ」

だけど指名されたということは正体がバレてしまったのだ。

「奈々ちゃんも黙ってないで、すぐにわたしたちに言ってくればよかったのよ。それで家を手伝ってくれば……」

おばは昔から、やたらとわたしを手元に置きたがり、いつも必要以上に手をかけてくれていた。そのため慎兄はかなり寂しい思いをしていたらしい。時々慎兄がわたしに意地悪するのは母親が自分より可愛がっているように思うからだ、カナちゃんが教えてくれた。それからはできるだけ気を遣うようになった。意地悪といっても義姉にされたことに比べると可愛らしいものだったし。

それに父の家から帰ってきてからは、まったく意地悪されなくなった。きっと彼なりに気を遣ってくれたのだと思う。

だからかな？ 慎兄が先に家を出たのは。わたしが遠慮なくこの家にいられるようになるの？

だけど将来慎兄が結婚して、お嫁さんが来たら邪魔になる。その時は……わたしが出ていかなければならない。

「奈々ちゃんは無理しないでいいのよ。いざとなれば慎一しんいちが面倒見ると言ってるんだから」

「慎兄はその気もないのに冗談で言ってるだけだからね。信じちゃダメだよ、おぼさん」  
まだ言ってる……。二年前、就職先が潰れて途方にくれていたあの時、慎兄がいきなりそんなことを言い出したのが、この誤解の元だ。

『就職が決まらなくても、おまえひとりぐらい俺が養ってやるよ。俺の嫁になればおまえもこの家を出なくていいし、ずーつとこのうちの子でいられるぞ』

今まで一度だつてわたしを女扱いしたことないくせに、突然そんなことを言い出した慎兄。

一番よろこんだのはおぼさんで『まあ、よかつたわ！ これで奈々ちゃんは一生涯わたしの娘ね』つて目を輝かせ、おじさんも『おお慎一、やつとその気になったか』と……

それ以来おじたちは、わたしが慎兄と結婚して正式にこの家の嫁になることを楽しみにしている。だけど、わたしにとつて慎兄は兄以外のなものでもない。いくら従兄妹同士は結婚できると言つても、兄妹同然に育つてきて今更つて感じだ。

それならもつとちいさいうちに養女になつて、おじさんたちの本当の娘になりたかつた。なのに、世間体を気にした父たちに阻まれた。

だけど上野の姓を名乗っていたので、言わなければ誰もわたしがこのうちの子じゃないなんて思わなかつた。成人した今となつては、どちらでもいいこと。そんなものがなくても、わたしたちは本物の家族のはず。

それに……カノジョがいるのに、そういうことを言つちゃダメだと思つよ慎兄。

高校の時も大学の時も就職してからも、いつだつてカノジョがいたくせに。女を切らしたことがないつていうのが彼の傲慢だ。就職して会社の近くにマンションを借りたのだから、女の人を連れ込むため……その現場、何度か目撃してるんですけど？

そのことを言うと『結婚してから浮気しないように今のうちに遊び倒してただけだ』と開き直る。いやいや、意味がわからないから！ 自分は遊びまくつておいて、わたしには『おまえは遊ぶのナシな』なんて不公平じゃない？ 飲みに行くのはストライカーズのチームメイトや会社の先輩たちじゃないと許可してもらえないのだから。

まあ今のところ、別にそれで不自由はしていないけれど。

そもそもわたしが気軽に男性と付き合えなくなったのは慎兄の影響だ。

中学の野球部を引退して髪が伸びはじめると急にモテだした彼は、やたら遊ぶようになった。高校で野球部に入らなかつたのも『坊主になるのがいやだから』という理由で、それからほとんどもない軟派ぶり。

付き合った女性は数知れず。どれだけ遊び人かつたことは、わたしが一番良く知っている。

その気がありそうな子は必ず口説く。自分にカノジョがいても、相手にカレシがいてもだ。

慎兄が男の本性と実態をまざまざと見せつけてくれたせいで、気軽に男の人と付き合う気になれなくなつたと言つても過言ではない。

一生を共にするのなら、できればわたしだけを大事にしてくれる人がいい。慎兄も妹としては文句なく大事にしてくれているけど、カノジョや奥さんなんて御免だ。

こうして現実の恋愛から目を背けてきたわたしにとって、カナちゃんはずっと別格だった。想い出の中の彼は王子さまで、汚れなき存在だったから。

それに……夫婦になるってことは、アレでしょ？ キスとか、それ以上のこともするんでしょう？

無理無理、絶対無理！ 慎兄とは今まで一度もそんな雰囲気になったことがないし、考えたこともない。それに、キスはやっぱりカナちゃんがいいな……なんてね。

ダメだ、さっきのキスを思い出して顔が火照ってくる。

「俺は別にいいぞ。おまえなら気心が知れてて、嫁姑問題もクリアしてんだから」

「わたしが良くないってば！ 慎兄にとつても、ありえないでしょ？」

「こないだいい男を前にしてなに言ってたんだ、カレシがいたこともなくせに……。ああそうか！ 俺が近くにいるせいで他の男なんて霞んで見えて困ったよな。悪かった」

「どこにいい男がいるっていうのよ？」

「ここにいるだろうが！ まあ、男を見る目だけは教育しておいてやったからな。今まで彼氏ができなかつたのは、俺以上の男がいなかったってことだろ？」

確かに一部の女性から見れば慎兄はイイ男かもしれないけれど……

「どうやったらずこまで自惚れられるのよ。慎兄は兄貴、それ以外のなにものでもないよ」

偉そうだしワガママだけど、いざという時は助けてくれるし頼りにもなる。けどわたしにとつて、すでに家族だ。もし夫婦らしいことをしなくてもいいのなら、一緒に暮らせるとは思っ

ど……

「ふたりとも相変わらず仲がいいわね。ほんとにいつ結婚しても、孫の顔を見せてくれてもいいのよ？ 若いおばあちゃんになるの楽しみだわ。それにわたし、奈々ちゃん以外のお嫁さんなんて、きつとイビつちゃうわね」

おばさんが満面の笑みで恐ろしいこと言い出すから困ったものだ。

「もう、冗談もそのぐらいいにしてよね」

だってわたしの心の中にはカナちゃんがいるのだから。けれどもその名前を今は出しづらかった。もう随分長い間、この家の中でカナちゃんの名前を聞いていない。彼の名前が出るたびに、おばさんが話題を変えるから、段々と誰もその話題を出さなくなっていた。これまでは連絡がないことに落ち込むわたしを気遣って話を逸らしてくれていたのかと思っていたのだけれど……

「それとも奈々生は、誰か好きな人でもいるのか？」

慎兄がいきなりその話題を口にして、思わず冷や汗が背中を流れた。

「べ、別にいないけど……」

カナちゃんに今日逢ったことは内緒だと言われている。だから今、話すわけにはいかなかった。

「奈々ちゃん。慎一と結婚して子供ができて、わたしたちが面倒見るから安心して外に働きに出ているのよ。今からその時が待ち遠しいわ」

「おばさん……」

すでに孫のことで頭がいっぱいになっているようで、その妄想は留まるところを知らない。

「それで、明日来るんだろ？ その、新しい上司とやらは」

呆れたおじが助け舟を出してくれた。

「そうなの。だから明日もすこし早めに家を出るね。上司より先に着いてなきやダメだろうから」  
「だったら会社まで車で送ってやるよ。俺も朝から奈々生の勤め先近くの取引先に行かなきゃなんねえんだわ」

へえ、珍しいな。慎兄が送ってくれるのって、なにかのイベントの時以外なかったのに。

「はいはい、ついでも助かるよ。ありがとね、慎兄」

滅多にないから甘えておこう。電車だと一時間かかるけれど、車だと三十分で済むから。

### 3 好きになっただけじゃない人

「気が重いな……」

月曜日の朝、わたしは誰もいない役員執務室で新しい上司が到着するのを憂鬱な気分です待っていた。

昨夜はカナちゃんとの再会できたうれしさと、今日の初顔合わせの不安とがごちゃ混ぜになって、よく眠れなかった。

義姉の婚約者と仕事なんてうれしくないに決まっている。真木先輩は綱嶋さんのことを悪くは言わなかったけれど、義姉を婚約者にした時点で好感は持てない。

それでも仕事は仕事。準備万端でアシスタント専用のデスクについて待っていると、執務室のドアがガチャリと開き、背の高い男性が入ってきた。

銀縁のメガネに黒い髪をふわりとうしろになでつけている。

先輩が好きそうな細身の三つ揃いスーツ。おそらくオーダーメイドのそれは、均整の取れたその人の身体に合っていた。スーツに関しては、わたしも先輩に影響されているのですこしだけうるさいかもしれない。

「はじめまして。本日よりアシスタントを務める上野奈々生です」

そう挨拶しながらゆつくりとお辞儀をする。秘書課研修でのお辞儀の指導は厳しくて、この角度とエレガントさを会得するのはなかなか大変だった。

なのでそのことばかりに気を取られ、あまり彼の顔を見ていなかった。

ゆつくりと頭を上げると、その人がやさしげな笑みを浮かべながら歩み寄ってくるのが見えた。あれ？ 黒い髪にメガネをかけているのですぐにわからなかったけれど、この人って……

「カ、ナちゃん？」

「言っただろう？ 奈々。すぐに逢えるって」

頬に押しつけられたスーツの硬い生地感触……。わたしはすでに彼の腕の中にいた。

「どうして……なんでカナちゃんが？」

一瞬、事態が理解できなかった。その間、抱きしめられたまま呆然として息を呑む。

わたしがここで対面するのは、新しい上司のはず。

それなのにカナちゃんがいるってことは……彼が綱嶋奏つてことなの？

——そんな……カナちゃんが、義姉の婚約者だったなんて！

昨日再会できた時はうれしくて堪らなかった。だけど、今日はうれしくないどころか怖くなる。

「は、離して……カナちゃん」

慌てて彼の胸元を押し返し、急いで彼から離れた。

もし誰かに見られたら……そう考えるだけで一気に血の気が引く。

「どうした？ 顔色が悪いね。そんなに驚かせた？」

わたしは必死で横に首を振る。驚いたけれど拒んだ理由はそうじゃない。彼が義姉の婚約者なら、こうして抱きあうなんてダメに決まってる。

「どうして……綱嶋なの？ カナちゃんは水城奏じゃなかったの？ 下の名前だって……！」

「亡くなった母の兄が綱嶋の社長だったんだ。養子になった時に名前の読みもそうに変えたことを……昨日は黙っていて悪かったよ」

「なんで昨日、そのことを言ってくれなかったのよ！」

カナちゃんが綱嶋奏になったと聞いていれば——昨日のキスを受け入れたりしなかったのに！

「ごめん。急いでたんだ。それに昨日は奈々が僕を待っていてくれたことがうれすぎて……話す余裕がなかった。それに、会社で話したほうが現実味があるだろ？ 僕が綱嶋だって」

確かにそうだけど、まさか……知らなかったの？ わたしが自分の婚約者の義妹だったこと。

知らずに逢いに来たの？ アシスタントにしたのも、わたしが幼馴染だったから？

「怒ってるのか？ 待たせてごめんよ。だけど、これからはずっと一緒にいられるから」

これからも一緒について……仕事上はそうかもしれない。だけど婚約している身でありながら、どうしてそんなことが言えるの？ わたしならなんでも言うことを聞くと思っただけ？ 義姉を妻に迎えて、わたしを愛人にでもしようっていうの？

「奈々？」

ううん、カナちゃんはそんなことを考える人じゃない。そう信じたい。

でも、わかっていることがひとつだけある。——このひとを好きになってはいけないうってこと。

義姉の婚約者に横恋慕するわけにはいかないのだから。

だけど……ずっとまえから好きだった場合はどうすればいいの？

昨日ようやく初恋の人と再会できてよろこんでいたところだったのに、こんなにもすぐ失恋気分を味わうなんて。これからはその想いを隠し続けなければならぬなんて……まるで拷問だ。

「あのっ……」

ダメだ、泣くな！ 言わなきゃいけないと決めていたことがあるのだから。

今日は、総務に戻してもらえよう頼むつもりでいた。笑顔で、穏便に話すつもりでいたのに。

——もう、この恋が叶うことはない。

その事実がわたしから感情のコントロールを失わせた。

鼻の奥がツンとして、自分の顔が歪んでいくのがわかる。

口を開くと嗚咽が込み上げてきて、それを全部呑み込もうとして……失敗した。

「ふぐっ……ううっ」

必死で維持した笑い顔のまま、ポロポロと涙が零れ落ち嗚咽を溢れさせた。

「泣かないで。奈々に泣かれると弱いんだ。悪かったよ、黙っていて」

彼の手がふたたび伸びてきて、思わず唇にキスされると思い構えてしまったけれど、カナちゃんはわたしの頭を抱え込んで髪にキスすると、ふたたび抱きしめて何度も頭を撫でた。

やめてよ！ 婚約者がいるのに……。ああもう、だんだん腹が立つてくる。苦しんでいるのはわたしだけなの？

「そうじゃ……ない！ なんで……もうっ」

「頼むから説明させてほしい」

説明？ 婚約していることを？ あんまり聞きたくないけれど……

「昨日はきちんと言わなくて悪かったよ。今はまだ、奈々と再会したことを、監督たちに知られる訳にはいかないからね」

腕から逃れようとするわたしを抱え込んだまま、カナちゃんは諭すように話しはじめた。

「やっぱり、おじさんたちがカナちゃんからわたしへの手紙や電話を止めたの？」

「ああ、何度か手紙を書いたし電話もしたよ。だけど取り次いでもらえなかったんだ」

それじゃ、やっぱり昨日カナちゃんが帰ってきていることは言わなくてよかったんだ。

もつとも、彼が義姉の婚約者、綱嶋奏と知った今、おじたちに言えるわけがないけれど。

「僕も途中で諦めて連絡しなくなっちゃった。会いに行きたくても、引き取られた親戚の家はすぐに出てしまったから……そんな余裕もなくてね」

えっ？ そっちの話？ 説明って婚約の件じゃないの？

いづれにしても、今までカナちゃんがどうしてきたのかも聞きたかった。

「僕を引き取った親戚の奴らは母の残した保険金が目当てで、入院費や葬式代でほとんど残っていないと知ると、高校に行かず働けと言いついたんだ。定時制でもいいから行かせてほしいと訴えてもダメだった」

「そんな、カナちゃんは昔から勉強が好きで、よくできたのに……」

わたしが小学生の頃、よく夏休みの終わりにチームのOBたちが、おじの家に勉強を教えに来てくれた。泊まりがけで来ることもあり、合宿のようですごく楽しかった思い出がある。

OBの中で一番頭がよかったのは、七つ上の誠兄まこと。現在はIT系の会社の社長さんだ。慎兄はその会社を立ち上げから手伝って、そのままそこに就職している。

その誠兄の次に頭がよかったのがカナちゃんだ。慎兄も要領がよくて頭はいいけれど、真面目に勉強しないし教える時にもすぐに怒り出すから……わたしはいつもカナちゃんに教わっていた。

カナちゃんはやさしくて辛抱強くて、教えるのもすごく上手だった。

「住み込みで働きながら定時制の高校へ行こうと考えて、保証人になってくれる人を探して、母方の戸籍を辿って綱嶋に行き着いたんだ。最初は疑われたし歓迎もされなかったよ。だが伯父は、あの条件を呑むなら学費と生活費の援助をしてやると言ってきたね……その条件がこれだよ」

そう言って自分の目と髪を指差した。

「髪と目の色を変えること。両親や過去を知っている者とは連絡を取らないこと。そして名前の読みを『かなで』から『そう』に変えるように言われたんだ」

「名前には、カナちゃんのお父さんの想いが込められていたのに」

亡くなったカナちゃんのお父さんはピアノ弾きで、『かなで』という名前はお父さんが残してくれた唯一の遺産だと話してくれたことがあった。それなのに……

「伯父は、父がハーフだったことや、母が夜の仕事をしていたことが気に入らなかつたんだ」

「そんな……カナちゃんの瞳の色、すごく綺麗なのに」

そつと覗き込むとコンタクトが入っているのがわかる。わたしの大好きなあおの瞳の色が隠されているのには、そんな理由があつたんだ。

「奈々がいつもそう言ってくれたから、僕は自分を嫌いにならずにいられたんだよ」

カナちゃんは幼い頃から外国人の子と言われ、小学校に入るまではかなりいじめられていたそうだ。だけど慎兄と仲良くなって、野球をはじめてからはなくなつたらしい。

「あの頃から、奈々は僕の心の支えだったよ。どんな時も笑っている君を思い出すだけで、僕はこれまでずっと頑張つてこれたんだ」

カナちゃんはわたしの顔を覗き込むと、やさしく微笑んだ。

昨日と髪や目の色が違っていても、他は皆同じだ。昔と変わらないやさしい顔立ちに表情、ソフトな口調にやわらかい仕草。それらに大人の色気みたいなものが加わって、ドキドキして頬が熱くなるのが止まらない。

——でも、大事に思われていたとしても、義姉を選んだのなるときめいている場合じゃない。たとえどれほど彼を好きでも諦めなければ……そう考えるとふたたび涙が溢れてくる。

「そんなに可愛い顔をして泣くなんて反則だよ。会社では我慢するつもりだったのに……」  
俯うつむいたわたしの顎あごをやさしく掴んで持ち上げ、彼はゆっくりと顔を近づけてきた。

「今度は昨日みたいなお子様のキスじゃすまないよ。大人のキスって、わかる？」

大人のキスってどんな？ と考える間もなく彼の唇が近づいてくる。

後退あしまたぎりしたけれど、うしろにあった自分のデスクに追い詰められ、それ以上逃げられない。そし

て彼の腕に捕らえられたまま、ふたたびキスがはじまってしまった。

「んんっ……っ！」

昨日と違って何度も角度を変えながら唇を押し当てられて、まるで食べられてしまいそうな勢い。腰と頭を固定されているので、苦しくても逃げられない。

ダメだよ！ 婚約者がいるのにキスなんかしちゃ……

これが本気のキスだつてことぐらい、わたしにだってわかる。それなのにその唇を、手を、本気で払いのけられない。濡れた舌先を拒めない。

それどころか、こんなふうにされても嫌じゃない……。いくら相手がカナちゃんでも、義姉の婚約者なのだから受け入れちゃいけないというのに！

「……っ」

後頭部に回されていた手が、わたしの髪を撫でながら耳朶をやさしく撫でていく。その途端、腰のあたりにゾクゾクと震えが走った。

——これはなに？ なんなの？

はじめての感覚に怯えた。

彼の指はわたしの首筋をなぞり、背中を流れ強く搔き抱く。

その間もキスは止まず、何度も角度を変えてわたしの唇を食み続けていた。やさしく、だけど逃げられないほど執拗に繰り返される。

「好きだよ、奈々……ずっとこんなキスを君にしたかったんだ」

好きって……婚約者は？ 義姉のことはどうなっているの？

「こっ……んん！」

一旦離れて質問しようとした瞬間、開いた唇の間から彼の舌先が潜り込んできた。顎を掴まれ、そのまま彼の舌に口内を蹂躪されてしまう。

粘膜と粘膜を擦り合わせ……内側を共有する、これが大人のキス？

この先を知らないわたしでも、なにを目的とするキスなのかわかってしまう。全身を密着させられ、そのまま彼に食べられてしまいそうで……怖かった。

逃げたいのに逃げられない。だけどそろそろ酸欠で限界。

「んんっ、んんっ！」

苦しくて息ができなくて、彼の胸を叩いた。足に力が入らなくて、どうすればいいのかわからない。腰砕けつて、こういう状態のことを言うの？

「奈々、鼻で息しないと死んでしまうよ？」

うれしそうな顔をして言うけれど、急にそんな芸当ができるはずないじゃない！ ついさつきまで、やさしく触れるだけのキスしか知らなかったのに……

「っ、やっ……やめてっ！」

彼の胸を押し返し、ようやくその腕の中から抜け出すことができた。けれども足はガクガク。彼が身体を支えてくれなかったら、床に座り込んでいたはずだ。

「そんなに嫌だった？」

覗き込んでくる心配そうな彼の顔があまりにも近くて、驚いて思わず頭を横に振る。

キス自体は嫌じゃなかった……

「だけどダメなものはダメ！ たとえ幼馴染でも、約束でも、婚約者の義妹にキスなんかしちゃダメに決まっている。こんなの……許されるはずがない！」

「なんで……どうしてこんなキスするのっ！」

腰を固定されて動けないながらも、必死で腕を突っぱって距離を作る。このままじゃ、またこの腕に取り込まれてしまう。

「我慢できるわけないだろ？ 昨日だってどれほど自分を抑えていたことか。大人になった奈々が僕を待っていてくれたんだ。ようやく我慢しなくて済むんだよ？」

我慢できないほどわたしとキスしたかったの？

その時わたしの中に罪悪感と、ほんのすこしだけ優越感が生まれた。たとえ一瞬でも彼が義姉よりもわたしを選んでくれたことが、義姉には決して敵わないと思っていたわたしに、すこしだけ自信を持たせてた。だけど同時に、そう思ってしまった自分に嫌悪を感じてしまう。

「お願いだから……これ以上なにもしないで」

「どうして？ こんなに僕のキスに応えてくれているのに？」

ねえ、なんでそんなうれしそうに顔してるの？ すこしは申し訳ないと思わないの？ 自分は婚約しておいて……勝手すぎるよ！

「僕だけの奈々……もう二度と離さない」

「やっ……んん！」

ふたたび引き寄せられて、キスがはじまってしまふ。わたしを離さないその腕は強引で、先程より更に激しくて。熱い粘膜に絡め取られたまま、なにも考えられなくなっていく。

キスって……こんなに生々しいものなの？

「ああ……奈々の全部を僕だけのモノにしてしまいたいよ」

その言葉にハツとする。それってキス以上のこと？ ダメ……絶対に許されない！

わたしは最後の理性をかき集め、必死で彼を引き離しながら叫んだ。

「なっ、なに言ってるのよっ！ 婚約してるくせに！」

カナちゃんはその言葉でようやく我に返ったのか、表情が一瞬にして曇った。

「それは……違うんだ、奈々」

なにが違うの？ わたしの義姉と婚約しているくせに！ と、告げようとした瞬間、執務室の内線が鳴った。

わたしは反射的にうしろを向いて、すぐそばにある受話器を取った。足に力が入らなくてふらつくけれど、必死でデスクにしがみついて、できるだけ平静を装う。

「経営企画部統括部長室です。……はい、出社されています。わかりました。すぐに向かうよう、お伝えいたします」

そう答えていったん電話を切り、それから彼に向き直る。

「統括部長、役員会がはじまるので、至急会議室まで来るようにとのことです」

精一杯、仕事用の声で伝える。

「もうそんな時間か……。奈々、婚約のことはきちんと解消できてから話すつもりだったんだ」

「いいから急いでください！」

早くひとりになって頭を整理したかった。そうでなきゃ、どうしていいのかわからない。

「わかった……。それじゃ行ってくる。昼も社長と約束があるから戻れないけれど、終業後必ずここに帰ってくるから。その時にゆっくり話そう。それまで待っていてくれるよね？」

やさしい言い方だけど、有無を言わせぬニュアンスだった。

「……わかりました。それでは、いつてらっしやいませ」

かしこまって部屋から出ていく彼を、深くお辞儀しながら見送る。

彼の姿が見えなくなると、そのままへなへなと床に座り込んでしまった。

「どうしよう……。またキス、しちゃった」

義姉の婚約者とキスするだなんてシャレにもならない。もし誰かに見られたら言い訳できない。

「このままじゃダメだよ」

きちんと話しておかなければならない。義姉とわたしのことを。さっきのキスを……。なかったことにはできないけれど、もうしてはいけない。

わたしは力の入らない身体を起こし、よろよろとデスクに戻る。そして酷い罪悪感を抱えたまま仕事に就くしかなかった。

「ちよつと待って、綱嶋さんが初恋のカナちゃんだったって……。どういうこと？」

お昼休み、執務室で大声を出す邦の口を、わたしは慌てて塞ぐ。

本来執務室には勝手に人を入れてはいけないけれど、緊急事態なので大目に見てもらいたい。SOSを出したわたしを心配して、真木先輩と邦がこっそり訪ねてくれたのだ。

「そうよ、ちゃんと説明しなさい！」

先輩に命令され、洗いざらい吐かされた。カナちゃんが綱嶋さんだったこと、昨日カナちゃんに再会したこと。その時キスされたことは黙っていたのに、邦にカマをかけられてバレってしまった。

「それにしても婚約者のいる身で奈々生に手を出したのは許せないわね。一屁股かけようだなって……。綱嶋くんを見損なっちゃわ」

カナちゃんを不実な人だと思いたくないけれど、昨日今日の行動だけ見るとそういうことになる。けれど不実なのはわたしも同じだ。キスを受け入れてしまったのだから……

「いつそのこと、お義姉さんから取っちゃえば？」

「な、なに言い出すのよ。邦ってば……」

「だって、その女は今まで奈々生のをいろいろ奪ってきたんでしょ？ だったら、ひとつぐらい奈々生がもらってもバチは当たらないんじゃない？ 綱嶋さんだって、その気みたいだし」

邦の言葉に思わずドクンと胸が鳴った。——本当に奪っていいの？ 大好きなカナちゃんと、これからの未来を夢見ても許されるの？

「相変わらず過激な発言だけど、それはいい考えね。邦」

「先輩まで、なにを言ってるんですか」

「でしょ？ これからずっと仕事で一緒にいるんだったら勝てる！ 奈々生でも誘惑できるって！」  
相愛わらず邦は強引な考え方をする。いいなと思つた人に彼女がいても、とりあえずアタックするのだ。本人同士が本気の恋をしていたら奪えないはずだからと。彼女のそういうタフなところは、すごいと思うけど……

「無茶なこと言わないでよ。わたしがあの義姉に勝てるはずないじゃない」

そう、無理に決まっている。義姉は容姿も学力も申し分なく、そのうえ宮之原という家のうしろ盾もあるのだ。父だつて、実の娘のわたしより彼女を選んだのだから。

それにもし奪えたとしても、今度はわたしが言われるのだ。

——義姉から婚約者を奪つた女だと。

それだけは嫌だつた。相手のいる人を奪うなんて非常識で不道德な行為だ。された側はどんな思いをするのか、母を間近で見てきたわたしが一番よく知っている。だからこそ……絶対にしたくなかつた。

「なんで諦めるの？ 奈々生にキスしてきた時点で半分勝つてるようなもんだよ？」

「勝ち負けじゃないよ……」

だからさつきのキスも、この想いも……さつさと忘れたほうがいいに決まっている。

「まだ結婚してないんだからいいじゃん！ 奈々生をアシスタントに指名した時点で、むこうもその気だと思うよ？ 婚約解消させて、そのあと付き合えばいいんだつて」

そんな強引なことを……邦はいとも簡単なことのように言つてのける。

「奈々生はどうしたいの？ 全力で奪うもよし、さつさと初恋にケリをつけて次に進むもよしだよ？ あんたは自分で思っている以上に魅力的なんだから、すこしは貪欲になりなさい。本当に欲しいものは、欲しいと言わなきゃ手に入らないのよ？」

口に出して願えば手に入るのだろうか？ あの義姉のものでも？

「やっぱ無理。奪うなんて……わたしは可愛くないし、あの義姉に敵うはずがないから」

「なに言つてんの！ 奈々生は充分可愛いよ。その気になれば奪えるつてば！」

「邦は義姉を見たことがないからそんな風に言えるのよ」

義姉は子供の頃から本当に可愛かつた。実際に彼女を見れば、わたしを可愛いなんて言えなくなるはずだ。

「それに、男の人にモテたこともないし……カレシもいたことがないのに、奪うとかないよ」

「それは奈々生がそういう場を避けてきたからでしょう？ 合コンにも行かない、紹介もいらないじゃ作る気がないと思えないわ。きっと初恋の彼が忘れられないんだろうつて解釈してたけど」

確かに先輩の言うとおりかもしれない。わたしがそう確信したのは昨日だけだ。

「まあ、軽い気持ちで奈々生に手を出そうとする男には渡さないけどね。——とりあえず綱嶋さんにも粉かけて反応を見ようか？ 基本、あたしが誘つてグラつく男は却下だから」

「えっ？ 邦、どういう意味……」

「しょうもない男は近づけないってこと。あたしが男なら絶対に奈々生を選ぶもん！ 人の悪口は言わないし、あたしなんかとも偏見なく付き合ってくれる、すごくいい子だからね」

邦は他の女性社員からあまり評判が良くなかった。付き合ってる人がいる相手でも平気で取る噂されているようだ。だけど彼女は不倫はしないし、二股もかけない。ただ、本能に忠実なだけ。「ちよっと邦。あんたが奈々生大好きなのはわかってるけど、今回はそこまでする必要ないわよ。綱嶋くんにもなにか理由があるかもしれないもの。まずはちゃんとふたりで話すといいわ」

「そうですね……そうします」  
「きつと、綱嶋さんはその女と婚約したことを後悔してるよ！」

たとえ婚約破棄したとしても、義姉と婚約していた事実を消すことはできない。わたしにとって、そのことが最大のネックだった。

「それにしても……前から気になってたんだけど、奈々生の自己評価って低すぎるよね？」

「先輩、いきなりなにを言い出すんですか」

「うん。それは入社当時からあたしも思ってた。可愛いのに、やたら可愛くないって言うし」  
だって本当に可愛くないもの。

「もしかして……奈々生の可愛いの基準って義理のお姉さん？ そして素敵な男性の基準が綱嶋くん？ それなら自分に自信がないのも、他の男性に惹かれないのもわかる気がするけど」

「そんなこと……」  
ないと思う。考えたことがなかったけれど。

「その宮之原美麗を取引先で見かけたことがあるけど、確かに綺麗きれいな人だったわ。奈々生がわたしなんてって言うのは、ずっと彼女と比べてきたからよね？ その子のほうが可愛いから父親が選んだ。自分は可愛くなかったから選ばれなかったって思ってたんでしょ？」

「それは……事実ですから」

「違うよ。モテるのはとびきり可愛い子じゃなくて、男をどこまでも受け入れる女かどうかだよ。でないとおたしにいつも男がいることの説明がつかないでしょ？ 真木センパイのほうがよっぽど美人で仕事もできるのにさ。デキすぎても男は引くんだよねえ？ センパイ」

「わたしを例えに出すなんて、いい度胸してるわね、邦。——でもそういうことよ。わたしはデキない男を許容しない。自信のある男だけ相手して、そうでない男は寄せつけないから。まあ、昨今きざ気概きざいのない男が多すぎるけどね」

「センパイの場合、威圧感ありすぎなんですよ。営業の人たちもビビってたじゃないですか」

「悪かったわね。使えない男が多くて辟易へきえきしてるのよ……。そういう邦は恋愛を語るだけあって、努力は惜おしまないものね。自分のことが嫌いなままでは誰かを好きになつたりできないし、もし付き合っても相手に依存するだけだから……。奈々生の場合には入社当時からスレてないのが可愛くて、わたしらで囲かこっちゃった結果、ますます男から遠ざけちゃった節ふしもあるのは申し訳ないけど」

入社当時から先輩に気に入られて、随分構かまってもらった。お化粧やおしゃれの仕方とかいろいろ教えてもらえてうれしかった。本当のお姉さんがいたらこんな感じかなって……

「でもさ、合コンはあまり好きじゃないって言うから、男が苦手なのかと思えばそうでもないんだ

よね？ 時々飲みに行ってるなんとかーズの仲間っていうのは男ばかりなんでしょ？」

「ストライカーズは、わたしが昔所属してた少年野球チームなの。うちのおじが監督してて、今も近所に住んでる子が多いから。OBのやつってる居酒屋によく集まるんだ」

「その中に、いい男はいないの？」

「いないかな？ 子供の頃から皆の変な面ばかり見てるし、それにいつも慎兄が一緒だから」

「保護者つきか……そりゃダメだ。あの従兄のお兄さんは手強いものね。前に粉かけてみたけど、完全にスルーだったわ」

邦と慎兄は恋愛に対するスタンスが近いから、気が合うと思ってたけどそうでもなかったんだ。

「邦……あなた奈々生の従兄にまで手を出そうとしたの？」

「でも、センパイはその彼と連絡取り合ってるんでしょ」

「それは……まあ、奈々生のこと頼まれてるから。変な男を近づけるなって煩いのよ、あの男は」  
入社してすぐの歓迎会の時、酔って帰れなくなって先輩の部屋に泊めてもらったことがあった。

翌朝、慎兄が迎えに来た時に、ふたりは連絡先を交換したらしい。それ以来先輩と一緒にのお出かけやお泊まりはお許しをもらえるようになった。

「とにかく、奈々生は自分にもっと自信を持たなきゃダメだよ。まずはそこから！」

「そうだね。そういう意味では、奈々生が気を許してる綱嶋くんが相手として一番ふさわしいんだ  
けどね」

確かにそうかもしれない……。だけど、このまま思い続けてもどうにもならない。

「いいんです、もう。婚約してる人のことをいつまでも想っててもしょうがないですから。さっさと諦めて新しい恋を探します。先輩、前に誰か紹介してくれるって言ってましたよね？」

「言っただけど……まあいいわ。奈々生がその気なら、前から邦に頼まれてた営業部のやつらと総務の合コンを設定するわ。女としての自信をつけるには実地で経験積むのが一番だからね」

「えっ、でもわたしもう総務じゃないですけど……」

「なに言ってるの！ 今でも総務の一員みたいなものよ。来月の営業との合同慰安旅行だって、元々奈々生が幹事をやってたんだから、参加に決まってるでしょ」

確かに旅行はわたしが担当して、手配と準備はほとんど終わっている。異動になったのであとのこととは邦に頼んでおいたけど、参加費も支払い済みだし、先輩がそう言ってくれるなら参加させてもらおうかな。

「よかったあ！ 奈々生がいないと寂しいもん」

邦がうれしそうに抱きついてくる。こういう感情表現がストレートなところが可愛いんだよね。

「今週は出張者が多いから合コンは来週になるけど、金曜の予定を空けておくこと。誰もお持ち帰りされなかったら、そのままうちでお泊まり会ね」

社内の合コンでお持ち帰りとかないと思うけど、先輩たちとの飲み会は楽しみだ。

早くカナちゃん以外に意識を向ける相手を探さなきゃ……だってこのままじゃつらすぎるもの。